有題無題

SDGs、市民に浸透

国連には各地の図書館との連携として「国連寄託図書館」という制度がある。国連との契約の下、国連の文書や刊行物を受け取り、所蔵して地域の人々に開放する拠点となる図書館を指定するものだ。現在、世界の136の国・地域にトータルで355館がある。日本では、北は北海道大学付属図書館から南は琉球大学付属図書館まで、14の図書館が指定を受けている。国連の公式文書や各種報告書を含めさまざまな情報にオンラインでアクセスできるようになった今、どの寄託図書館もその存在意義を模索中だ。

年に一度、14の寄託図書館の担当者が集まり研修会を開催するが、1月の会合では、いかに地域のアウトリーチ拠点としての新たな役割を担おうとしているか、事例発表をしてもらった。

うれしかったのは、持続可能な開発目標（SDGs）に関連する書籍を集めて企画コーナーを設けたことに加えて、国連広報センターがウェブサイトに掲出・提供するさまざまなSDGs関連情報や資料をパネル化して展示してもらっていることだ。英語の原文からの翻訳を担当する職員が「苦労して日本語にしたかいがあった」と感激していた。

さらに励まされたのはSDGsが「接着剤」となって、出席した図書館関係者から多くの会話と情報共有が生まれたこと。改めてSDGsが持つ接着効果を痛感した。

国連広報センターにとってウェブサイトは重要な発信のプラットフォームであり、定期的に閲覧状況を分析しているが、ここ数年で人気コンテンツに大きな入れ替えがあった。以前一番よく読まれていたのは「国連で働く」という国連でのキャリア形成に関するセクションだったが、SDGsに関するコンテンツが次第に上位を占めるようになり、今では他を大きく引き離している。

SDGsコンテンツは閲覧時間も長く、じっくり読み込もうとしてくださっていることがデータからわかる。また、センターのウェブサイト全体へのアクセスも飛躍的に増加した。「知る」ことはSDGsの実践への最初の一歩であり、好ましい方向に進んでいると実感している。

学習指導要領の改訂を受けて、2020年度からは小学校で、21年度からは中学校でSDGsについて学ぶようになる。柔軟性あふれる頭で、世界での出来事を自分の周りのこととつなぎ、さまざまな分野を結び付けながら思考する力を養う上で、SDGsはまたとない枠組みを提供するだろう。家庭での会話で「SDGs」という言葉が自然と出てくる日も遠くない。

国連広報センター所長 根本 かおる

「知る」ことが実践の第一歩

ねもと・かおる　86年（昭61）東大法卒、同年テレビ朝日入社。米コロンビア大学大学院国際関係論修士修了。96年から国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）で難民支援活動に従事。世界食糧計画（WFP）広報官、国連UNHCR協会事務局長なども歴任。13年から現職。神戸市出身。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社